

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年5月31日現在

機関番号：14301

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2012

課題番号：21520670

研究課題名（和文） 松平定信の世界観と国家意識

研究課題名（英文）

Study on the national recognition and world-view of Matsudaira Sadanobu

研究代表者

岩崎 奈緒子（IWASAKI NAOKO）

京都大学・総合博物館・教授

研究者番号：80303759

研究成果の概要（和文）：本研究の特色は、寛政期の対外政策を、当該期を世界観の変容というダイナミズムの中に位置づけた点にある。具体的には以下のことが解明できた。(1)蝦夷地政策に積極的であった田沼期と蝦夷地幕領期との間に位置する寛政改革期は、蝦夷地政策を展開させる重要な一段階であった。(2)対ラクスマン外交は、むしろ、日本の伝統的な対外関係のあり方に即して策定された。(3)定信はロシアに対する深い知識を背景に、礼節を持った法治国家、すなわち、文明の国として、ロシアに対し日本を対置した。(4)「鎖国」の観念がナショナリスティックな色彩を帯びつつ、日本の国是として定着する契機は、日露紛争という近世日本が初めて遭遇した深刻な対外的危機にあった。

研究成果の概要（英文）：

As for this study, there is the greatest characteristic at the point where I placed a foreign policy from end of 18th century to the early 19th century in dynamism called the transformation of the foreign recognition. The concrete result is as follows. (1) Ezo policy of Matsudaira Sadanobu was an important epoch to realize the direct control of Ezo by the shogunate. (2) The diplomatic negotiations with Russia by Sadanobu were based on the plan of traditional foreign relations of Japan. (3) In diplomatic negotiations with Russia, Sadanobu placed Japan as a constitutional state with the courtesy namely a state of the civilization. The policy of Sadanobu was derived from deep knowledge for civilized country Russia. (4) Idea that they should close the country, was established in Japan in the wake of the Russo-Japanese conflict of the early 19th century.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	600,000	180,000	780,000
2010年度	700,000	210,000	910,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
2012年度	500,000	150,000	650,000
年度			
総計	2,300,000	690,000	2,990,000

研究分野：日本近世史

科研費の分科・細目：史学・日本史

キーワード：鎖国・ロシア・松平定信・華夷観念・蘭学

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

1. 研究開始当初の背景

1980年代以降、近世後期の対外関係史の研究は、藤田覚氏の精力的な仕事により大きく進展した。藤田氏は、1960年代以来進められてきた鎖国概念の再検討という研究潮流の中で、寛政期、松平定信が政権の中核にあった時期のロシア使節ラクスマン来航とそれへの対応が、近世初頭以来の日本の対外関係のありようを、「鎖国」という概念でとらえなおす初発の契機となったことを解明した。

その研究の深化は著しいものであったが、本研究を開始する時点では、近世初期から後期への転換の特質の把握という点で、なお未解明の領域が残されていた。すなわち、近世初期に形づくられた対外関係の枠組みが、「鎖国」としてとらえ直される段階で、その関係を支えていた意識の部分は変わったのか否か、という問題である。近世初頭に構築された外交秩序を支えた華夷観念は、ロシアの進出に直面してどのように変化したのか、あるいは変化しなかったのか。18世紀後期に突如現れたロシアという未知の国家を、日本はどのようにとらえ、自らをどのように対峙させようとしたのか。こうした問いに答える研究はまだ行われておらず、寛政期に始まる対外関係の再編を支えた意識の解明は、課題として残されていたのである。

2. 研究の目的

本研究は、対外関係のまさに転換期に、幕府の中核にあって外交の任にあたった松平定信の著述及び蔵書を主な素材として、定信の世界観と国家意識のあり様を具体的に解明することにより、寛政期に始まる対外関係の再編を支えた意識の特質を解明しようとするものであった。

3. 研究の方法

研究は、次のように2段階で進めた。

- (1) 定信がその著「秘録大要」（文化5年成立）中に掲げた全28タイトルの書目リストは、ロシア学習をすすめる「秘録大要」に始まり、海防の必要を説いた「婆心録」で終わる。リストを構成するのは、他に、ロシアの地誌や現況（「魯西亜志」他）5点、カムチャツカの地誌（「加模西葛杜加国風説考」）1点、中ロ関係史（「鄂羅斯紀事」）1点、蝦夷地・千島事情（「蝦夷草紙」他）2点、日本論（「鎖国論」）1点、レザノフ来航時の記録（「崎嶺要録」他）3点、文化露寇事件関係（「牛泉秘説」他）5点、ロシア・ヨーロッパの軍事力関連の軍書（「蛮国砲術書」他）8点である。

その内、現存を確認できている20タイトルの書物1点1点を、内容のみならず成立事情や情報源等を総合的に検証した。これら1点1点を丁寧に読み解くことにより、定信がロシアをどのような国家として把握し、日本をどのように対峙させようとしたのかの解明を進めた。

- (2)(1)の成果を踏まえ、定信が老中職にあった段階の対ラクスマン外交、および、ロシアとの狭間の地域として急浮上した蝦夷地政策に焦点をあて研究を進めた。

新たに発掘した「蝦夷惣論」という新史料や、従来写本のみ研究に利用されてきた「魯西亜人取扱手留」と「蝦夷地御備一件」を、定信自筆原本を用いてその読み直しを進め、定信がどのような世界観に基づいて外交に臨み、日本をどのような国家として対峙させようとしたのかという問題の解明を進めた。

4. 研究成果

本研究の成果を、主な発表論文に即して説明すれば、以下の通りである。

- (1) 主な発表論文3. 「近世の対外関係」では、近世の対外関係の通史を外観し、本研究が対象とする寛政期の歴史的位置を見通す作業を行った。本稿では、物流から見える国際関係の実態と、外交関係とを区別するとともに、通常、四つの口として論じられる外交の問題を、東アジアの一員たる近世日本の基本的属性と、西洋との関係とに腑分けして検証した。このように整理することにより、寛政期以降に進められる近世初頭以来の対外関係の再編が、西洋との関係の変化と東アジア世界における日本の位置との間の拮抗関係の中において進んだことを見通すことができた。
- (2) 主な発表論文4. 「松平定信とロシア」は、松平定信のロシアへの関心のあり様を、定信の著述「秘録大要」とロシア関連の蔵書から解明したものである。保守的なイメージの強い定信が、蘭学に関心を持っていたことは古くから指摘されているが、その関心は、自らの関係する蔵書を丹念に研究するという行為を伴う深いものであり、かつ、ヨーロッパの帝国ロシアについての学習が、中華以外の世界を野蛮視する日本人の伝統的な文化意識に批判的なまなざしを向ける契機となっていたことを明らかにした。
- (3) 主な発表論文2. 「三国通覧図説一衝撃の

『蝦夷国全図』は、松平定信の蔵書である「加模西葛杜加国風説考」（赤蝦夷風説考と誤称、工藤平助著）と深い影響関係にあった林子平の「三国通覧図説」の附図の内、とりわけ林子平の描いた「蝦夷国全図」の意義を明らかにした研究である。

従来、明和期のベニョフスキー来航が、ロシアの南下に警鐘をならした初発の契機とされる。それ自体誤りではないが、しかし当時の日本の地理認識に即してみれば、ベニョフスキーの警告を警告としてとらえ得るほどの知識を有しておらず、したがって、ベニョフスキーへの反応は、ロシア対策ではなく、ベニョフスキーの警告の内実を知ること、すなわち、日本北方地理研究として現象したところに特色がある。

この研究では、本図が、ベニョフスキーの警告の地理学的検証の試みを総合して作成された最新の研究成果であったことを検証した。加えて、著者林子平の処罰が「三国通覧図説」刊行の7年後であったことに着目し、天明から寛政期までの時期が、幕府がロシアに対する知識を得て、危機感を深める時期に重なることを明らかにした。

- (4) 主な発表論文 1. 「松平定信と『鎖国』」は、寛政期のラクスマンへの対応から文化期のレザノフ来航と日露紛争にいたるまでの経過において、定信の「鎖国」に対する認識がいかに変化したかをあつげ、その歴史的意味を解明した論文である。

本研究によれば、寛政期に松平定信が主導的に作成し、幕府がラクスマンに示した「国法書」は、ロシアの江戸回航を回避するために異国船の打ち払いを「国法」として提示し、松前での書簡の受け取りを拒否する一方で、対立を緩和するため、通信・通商には交渉の余地があることを伝え、長崎に来航するよう促した。通商を容認する態度は、おおむねそれ以前の対外政策に準拠しており、ラクスマン外交を「鎖国」観念成立の最初の段階とみるのはあたらぬ。その一方で、「国法書」は、長崎をオランダ船・唐船以外の異国船の受け入れ窓口として外国に向けて提示した点で画期性があった。

ラクスマン外交において、さらに特筆すべきことは、定信が「礼と法」を旨として、ロシアに対峙した点である。定信は、ロシアが、豊かですぐれた文明を有するヨーロッパの巨大帝国であることを踏まえ、日本を、礼節をわきまえた法治国家として、ロシアに対峙させたのであ

った。

また、文化期の日露紛争後、定信は寛政期以来の貿易容認の態度を翻し、ロシアの通商要求に応ずるべきではないと幕府に進言した。ロシアの襲撃を受けた際の幕吏の失態に向けられた批判に直面し、幕府の権威が損なわれ、幕府支配を揺るがすゆゆしき事態と見抜いたためであった。定信をして貿易容認論を放棄せしめた契機は、文化期以降の幕府の対外政策の方向性にも大きな影響を与えたと考えられる。

- (5) 現在投稿中の「寛政改革期の蝦夷地政策」は、寛政改革期の蝦夷地政策が、幕府が蝦夷地の開発を進めようとした田沼期の積極策を起点とし、寛政11年(1799)の東蝦夷地幕領化に帰結する歴史過程の中にどう位置づけられるのかを解明した論文である。

本研究によれば、寛政改革期の蝦夷地政策は、対ロシア政策の一つの現れであり、ロシアとの関係の深まりに伴い、進展していく。天明8年(1787)、ロシアの動向に関心を持っていた定信と本多忠籌とは、軍備と開発を主眼とする幕府直轄策を唱えたが、ロシアに関心を持たない層が未だ厚く存在したため、その提案は受け入れられなかった。

寛政元年(1789)のクナシリ・メナシの戦いは当初ロシアの関与が取り沙汰されたため、幕府の緊張感が高まった。事件を引き起こした主体が明らかになりロシアの関与は否定されたが、この事件を契機として、蝦夷地の軍備とアイヌの帰服政策が蝦夷地政策の基本的要件であることが確認されるに至る。そして、松前氏をその政策を担う藩に再編するとともに、目付を派遣し幕府が松前藩を監視する方向が確認された。

寛政3年の幕府目付の蝦夷地派遣の後には、奥羽の防衛拡充の必要性が確認され、ラクスマン来航後には、松前委任のまま奥羽の地に蝦夷地政策をつかさどる幕府奉行を置くことで合意を見た。奉行が奥羽の地であったという点に限界はあるが、寛政11年に東蝦夷地の幕領化により実現した、蝦夷地の軍備とアイヌ帰服策を幕府の奉行が担う体制に向けて、寛政改革期の幕府の蝦夷地政策は着実に歩みを進めていったのである。そしてこの過程は、ロシア対策の一環として蝦夷地政策を推し進めようとした定信と忠籌の方向性が、ロシアとの関係の展開に伴い、消極派にも次第に受け入れられる過程でもあった。

以上が、研究期間中に実施した5つの研究の個別の成果である。これらを総合して、本研究の研究史上特に重要と思われる成果をまとめるなら、蝦夷地政策に積極的であった田沼期と蝦夷地幕領期との間に位置する寛政改革期を、蝦夷地政策の展開においてきわめて重要な意味を持った段階として位置づけたこと、対ラクスマン外交が、むしろ、日本の伝統的な対外関係のあり方に即して策定されたことを明らかにしたこと、また、定信がロシアに対する深い知識を背景に、礼節を持った法治国家、すなわち、文明の国として、ロシアに対し日本を対置したことを明らかにしたこと、「鎖国」の観念がナショナリスティックな色彩を帯びつつ、日本の国是として定着する契機を、日露紛争という近世日本が初めて遭遇した深刻な対外的危機に見いだしたことの4点である。寛政期の対外政策を、世界観が大きく変わるといふ当該期特有のダイナミズムにおいてとらえかえした本研究の成果は、従来の近世後期対外関係史研究を大きく深化させたものといえる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計5件)

1. 岩崎奈緒子「松平定信と『鎖国』」『史林』95-3、2012、35-67頁、査読あり
2. 岩崎奈緒子「三国通覧図説－衝撃の『蝦夷国全図』」『歴史と地理－日本史の研究』231、山川出版社、2010、29-34頁、査読なし
3. 岩崎奈緒子「近世の対外関係」『日本の歴史 近世・近代編』(ミネルヴァ書房)、2010、25-48頁、査読なし
4. 岩崎奈緒子「松平定信とロシア」(コラム)『日本の歴史 近世・近代編』(ミネルヴァ書房)、2010、49-50頁、査読なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

岩崎 奈緒子 (IWASAKI NAOKO)

京都大学・総合博物館・教授

研究者番号：80303759